66
50

086061-000-5

66-50

七拾一番歌合

土佐　光信／画

M27

DBD-0748

明治二十七年八月飜刻

七拾壹番歌合

東京

經濟雜誌社

七拾壹番歌合

七十一番歌合 上

天地ひらけし時。さかほこのくだれりけるより。道を玉ほことなづけて。よろづの道をたてたり。とに歌を。やまと〻名づけて。わがくにのことわざなりければ。神の道にもかよひ。人の心をもやはらげ〻れば。金殿の光。となるみぎり。をろかなる草のむしろにも。心をのべける。あまりその道をかたどりて。をの〳〵左右をわかちて歌を合侍けり。題は月と戀を出して。衆議にて判けるなるべし。いと興ありけるにや。

題　月　戀

一番　左

をしなをす工もいざや。すみかねに。さげすむ月のかたぶきにけり。

右

軒あれて古きかぢやの。太郎槌。ふりさけみれば月のさやけき。

左の歌。さけすむ月と。よくつゝけたれども。うた合には。かたぶく月。あやなくきこゆ。
右のうた。太郎つちふりさけ見ればといへるも。月をほめたり。まさると申べけれども。
一番の左なれば。なずらへて。持と申べし。
くれごとに獨ふし木のあらつくり。いつてをのめのあはむとすらん。
うらめしや人の心のあらやすり。ひかきめにだにのぞかれぬ哉。
左右ともに。てをのめ。ひかきめとよめり。おなじほどの歌ざまなるべし。猶持とす。

番匠

我々もけさは
相國寺へ
又めされ候。
暮てぞ
かへり
候はん
ずらむ。

鍛冶

京ごく殿より
うちがたなを御
あつらへ候。大事に候
かなかゝるべきと。

二番

故郷の壁のくづれの月影は。ぬるよなくてぞみるべかりける。
月のもる軒端のきりの薄ひはだ。ふきもとをさぬ秋の風かな。
左。壁の崩といひて。ぬるよなく月みる。いとやさし。右は。霧の薄ひはだふきとは續きたれども。風を本にいひて。月をもてなす心少し。仍左勝にこそ。

我袖のひるよもあらぬなまかべの。よりそふ人のなきもうらめし。
軒つけを先ふきそむるひはだやの。まだむねあはぬ戀もするかな。
左。なま壁のひるよなきに。よりそひがたきといふ。いと興あり。右。軒つけを昔はじめて。まだむねあはぬとよめる下句。歌ざますこしまさるべくや。

壁塗

やれ〳〵うばらよ。
いへにてこて
猶とりてこ。
かべの大く
まいりて候。
あたじとく
して候はゞや。

檜皮葺

このむな
かはらか。
をそき。

三番

いかにせんとがすもいらぬつるぎ太刀。峯なる月のさびのこる哉。
ながむとてぬるよもなきに。あら漆。はけめもあはぬ村雲の月。

左歌。五文字かなはずきこゆ。峯のあひさらひ。あらまほしくや。右は。あら染のはげめもあはぬを。村雲にたとへたる歟。左右ともに。さしても聞えず。持にて侍べし。

いつまでか蛤になることがたなの。あふべきとのかなはざるらん。
志ぼれども油がちなる古うるし。ひるともなき袖をみせばや。

左右ともに。心とばきゝて。面白くきこゆ。よき持にこそ侍るめれ。

研

さきがおもき。
今少をさばや。
ぬしにとひ
申さん。
はゝや。さは
いかに。手をきるぞ。

塗士

よけに候。
きかきの
うるしけに候。
いますこし
火とるべきか。

四番

蓋こうの只一しほのそら色に。光そへたる秋の夜の月。

よるさへや織とをさまし。機絲のたてぬきしるくみゆる月影。

左は。我道の才覺誠に聞えたり。右は。歌ざまうるはしくて。まかも月の殊なるを褒たり。はた絲は心引筋也。勝べくや。

まかま川逢瀬もいつとちぎらぬに。あながち人の戀しかるらん。

織はつるしづ機帶の今はとて。いつうちとけてあひみそめまし。

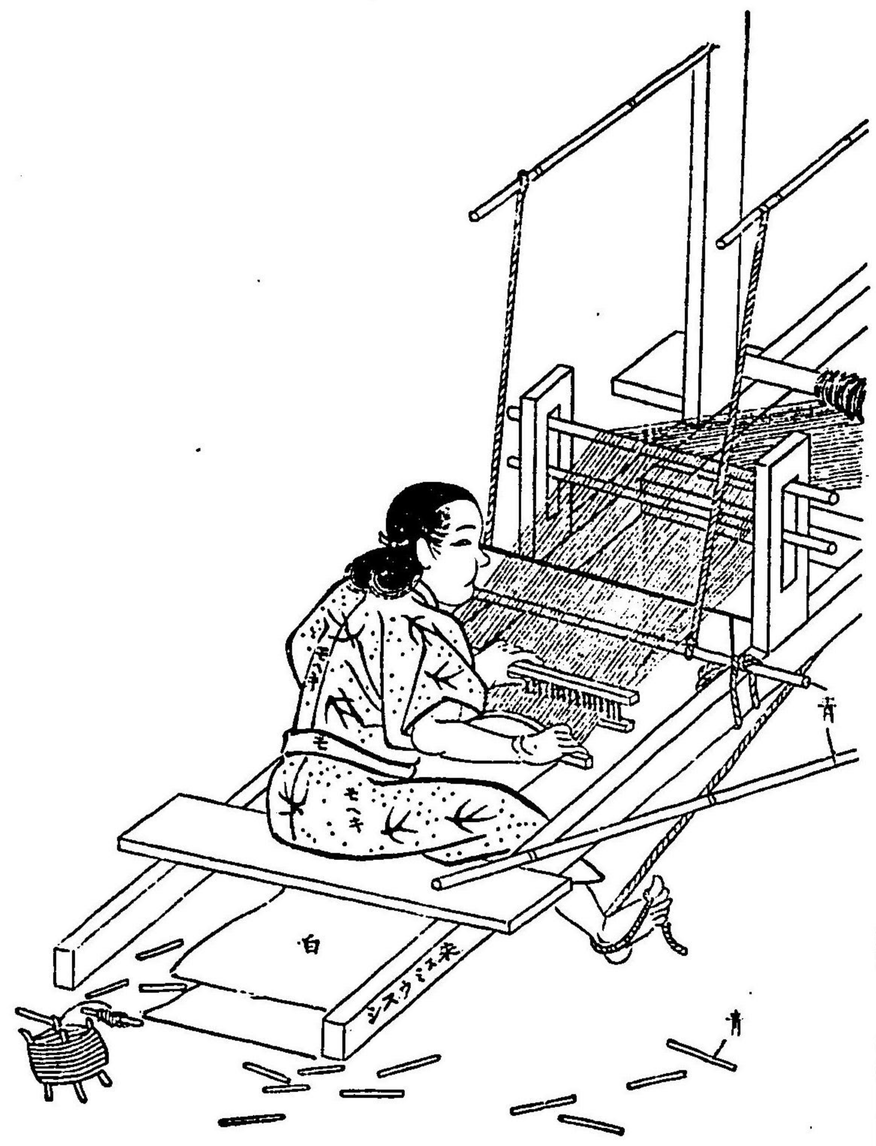
左右ともに。歌ざまよろし。まゐて勝負あるべきならば。右の歌。五文字より。末の句まで。よくいひかなへり。すこしはまさるとや申べからん。

紺搔

たゞ一しほそめ
よと
おほせらるゝ。

機織

あこやう。
くだもて
こよ。



五番

汲たむる桶なる水に影みれば。月をさへこそ曲いれてけれ。

心して車つくらむ。秋のよのながえの月のをそくめぐらば。

左題。月をまげいるゝこと。入月を願ふにゝたり。すこし心なきにや。右は。月をゝそく造りなさむといふ。たくみよくきこゆ。右勝にこそ。

逢とはそれぞ。とぢめの櫻がは。かばかりとこそ思はざりしか。

我戀はくさびもさゝぬ小車の。めぐり逢べきたのみだになし。

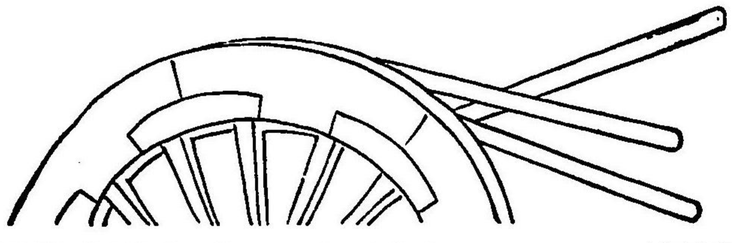
左。とぢめの櫻かはかばかりと續けたるさま。面白く聞ゆ。右心はさもと聞ゆるを。月の歌にも。戀の歌にも。めぐるとよめり。懷狹にゝたり。是は左勝侍るべし。

檜物し

ゆおけにも
これはことに
大なる。
なにのため
に。
あつらへ
給ふや
らむ。

車作

ひりやうのわとて。
よくつくれと
おほせ候。



六番

なにしゐへば秋のうちにも播磨鍋。ふたゝびにゝる月をみる哉。
あち酒の暇し空に似たる哉。あまげの月のまぼり出つゝ。

左は。ともに八九月。二たびの名月をよくよせて。なべふたとつゞけて。まかも月を褒たり。右は。秋の明月にむかひて。春を思ひ出るのみならず。雨氣をさへ詠すること。風情を失ふにゝたり。仍以左爲勝。

うらめしや筑摩のなべの逢とを。我にはなとかかさねざるらん。
我戀は忍ぶとすれどさか瓶子。口こそつゝめ色に出つゝ。

左歌。賦に撰集などに入たりとも。恥ずや侍らん。右はいさゝかたはぶれ歌なり。仍左可勝。

鍋賣

はりまなべかはしませ。
かまもさうらうぞ。ほし
かる人あらば仰られよ。
つるをもかけてさう。

酒　作

先さけめせ。かし
はやりて候。うす
にごりも候。

七番

宵ごとに都に出るあぶらうり。更てのみ見る山崎の月。
見渡ば秋の田面のいなもちゐ。おほぎに出る山のはの月。

左歌。暮ごとにとこそいふべけれ。夜やはあぶらうるべき。右歌は。秋のたのものいなもちゐ。まことにさるとゝきこゆ。仍もちゐにつくべきにや。

山崎やすべり道ゆく油うり。打こぼすまでなく涙かな。
ながらへて君とねのこはいざしらず。三がひとつもせめてあはゞや。

左歌二首ながら。第三句にあぶらうりとをける。ふとこころせばくきこゆ。そのうへ此歌の故事を思ふにも。山さきのうばがもとに。あぶらかひにいたればとこそ侍れ。それをいま作者なれば。油うりとよめるも本説にたがふめり。たゞあぶらかひと詠べきにこそ。又なく涙とばかりにては。戀のこゝろうすくや。右はともに本説をいひ出て。もちゐといふ字をまはしてよめる。やさしくきこゆ。勝と申べし。

あぶらうり

きのふからいまだ
山ざきへも
かへらぬ。

もちゐうり

あたゝかなる
もちまいれ。

八番

筆つかにきりつゝめたるさゝ竹の。永き夜ゝらず月をみる哉。
打絶ていとめまばらのあら莚。いのねらるべき月の影かは。
左。筆柄にきりつゝめたるといひて。末にながき夜ゝらぬとよめる。たくみ也。右。始中
終。當道をのべたり。是又捨がたし。よき持にて侍なり。

なびくほどいかゞゆはまし。我爲は夏毛の筆のこゝろことはさを。
戀しさの心ものべぬ獨寢は。九條むしろもせはからぬかな。
ふでは。いふばかりなく。おもしろく。むしろは。うちすてがたし。是もよき持にこそ。

筆ゆひ

うのけは。
毛のうらおもて
みえぬが
大事にて候。

莚うち

てをまむしろ。
かし(うイ)ま(御さ)
も候ぞ。

九番

秋までは煙もたてぬ。炭やきの心とすまず月をみる哉。

一たきにさも燃やすき小原木の。あかしもはてず入がたの月。

左は。月を翫ぶ心深けれども。此風情。當時連歌などに。いひふるしたるにや。右は。歌合に入かたとよめる。聊心なきに似たれども。巧なるによりて爲持。

炭竈も我にはをとる思ひかな。けつとおらぬ戀の煙よ。

かこたるゝ身の程ならば。おはら木のふすべらるゝも嬉しからまし。

左。させる難なし。右は。かこたるゝ。ふすべらるゝ。此るゝの病ありといへども。心珍しきにゆづりて爲勝。

炭やき

けさいで

さう(いイ)まう

たか。

小原女

あごせば。
まいり
あひ
て候けるか。

十番

秋のよも限有けり。馬かはふ聲すむほどの明方の月。
いけはぎの皮かはふ時ながむれは。あかはだかにもすめる月哉。
左右ともに。をのれが時の月を詠たれば。月の難あるべからず。右は逸興あるに似たり。仍爲勝。

馬かはふくらう時の立君の。宵曉にかよひなればや。
朝歸る道行ふりのかはかはふ。我逢つると人にかたるな。
左歌。身におふ戀とおぼえて。立君に寄たり。心あるにゝたり。ばくらう時又よせあるにや。右。別路の時分。行逢べきこと眼前也。心詞同品なるべし。爲持。

むまかはふ

かはかはふ

十一番

秋さむき深山の里にたくほだの。永き夜盡ぬ月影も哉。

闇にこそいさりはせしか。鹽がまのぬる夜すくなく月をみるかな。

左。ほだのながくつきぬに。月を思よせたる。いうに聞ゆ。漁人はやみにねす。月に休む

といふを。是は松島のあまにや。心有さま也。持にてこそは侍らめ。

猶れの數もしられぬ。あは畑のうちわするべき時のまもなし。

忘らるゝ汀にすつる。たくなはのくりかへしてもうらめしきかな。

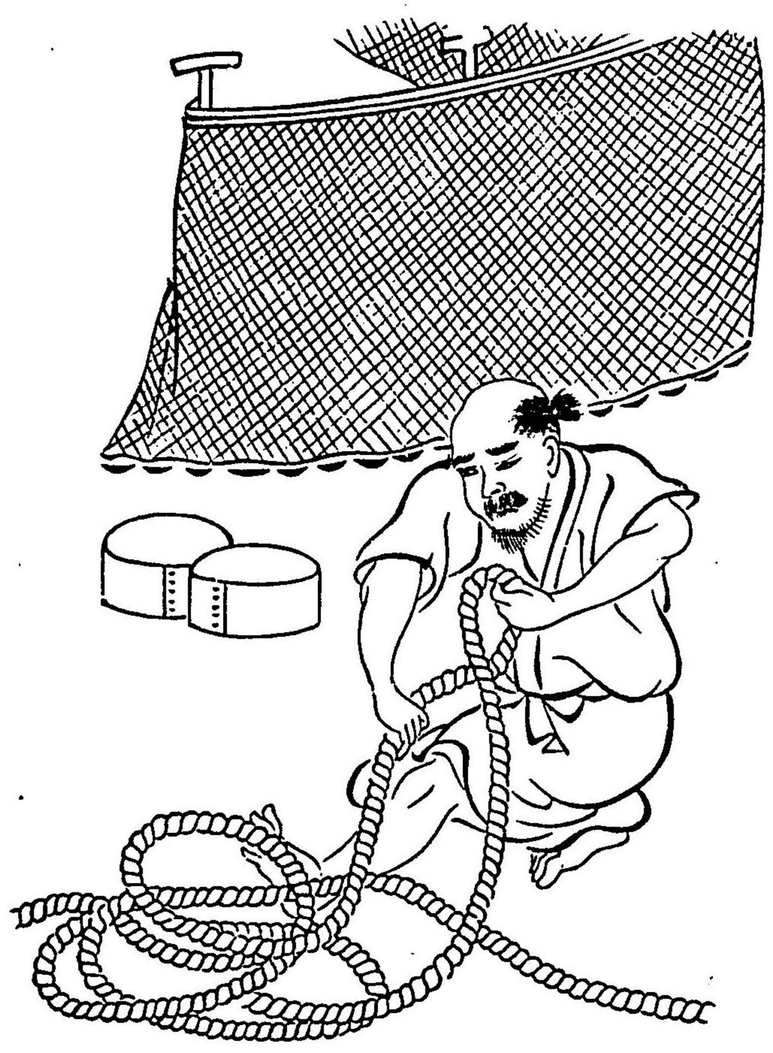
左。粟のかずしらぬばかりを詮とよめるにや。右歌がら。よろしく侍り。可勝。

山人

ことしは。秋より
さむくなり
たるは。

浦人

この網。はや
きるゝは。
たかうれ。



十二番

踏るさの暮はつるまでこる柴の。おひ〳〵出る山のはの月。
夕草にをく露ながらかりこめて。月影をさへつかねつる哉。
左右ともに。おもしろく侍り。可爲持。
やすむとておろす薪につみしりぬ。後にだにも人のよせねは。
朝夕に君をばかれず。みまぐさの。しかなかりぞと人なとがめそ。
左は。逸興あり。右は。かのをかの歌をよくとりなしたり。尤かつべくや。

木こり

草かり

ふしみ草とて。
世にもてなさるゝ
みまぐさよ。

十三番

秋や深き月の光もさびえぼし。頭の上に影の成ぬる。
秋寒きねやの扇の風絶て。雲の折めの月ぞかくるゝ。
左歌は。停午の月をよめるか。右は。雲のおりめことゝ〳〵しく聞ゆれども。今少しまさる

にこそ。
いかにせんしなれぬ懸の痩やまひ。むくのみ色に身は成にけり。
骨こはき扇の紙の薄そくい。思ひもつかぬ人に懸つゝ。
左。懸に痩くろむと。本説なきにあらず。烏帽子のむくのみ色。能思寄たるにや。右は。道
理は立て聞ゆれど。五文字鹹にこはく侍り。左。勝べくや。

えぼし折

今時の御
えぼしは。
ちと
そり
て候。

扇うり

あふぎは候。
みな一ぱん
扇にて候。

十四番

遠山の腰めぐるまで更にけり。雲間の月のみての下帶。
秋寒み雲も殘らぬ。月かげは霜とみるまでまろい物哉。
左歌。いひしれるさまにはみえ侍れど。右。逸興ありて。めづらし。よりて爲勝。
人妻にかけし衣の。細帶のくけちもあらば嬉しからまし。
戀すとや人のみる覽。おしろいのきはづくまでに流す涙を。
左。衣のほそ帶といひ。人つまのくけぢなど。能取なしたり。右は白い物の涙に際づくらん。いかさま色の黑きにや。然らば戀さめしつべし。左勝にこそ。

おびうり

此おびたちて。
のち見候はむ。
いそがしや。

ゑろいものうり

百げも。なからげも。
いくらもめせ。
いかほどよき
御ゑろいか候ぞ。

十五番

こと浦の月もなにはの。蛤の貝ひろふまでえやはすみける。
かつら鮎とりてうるかとやみまたは。月の價はなく成ぬべし。
左。本歌にすがりて。ゑかも月をほめたる宜侍り。右。あたひといふ詞。歌にも侍らめど。
何とやらん。賤くきこゆ。やみを待らむも。又いかゞ。仍以左爲勝。
待人のさはるといはたきませかし。蛤うらふ雨は降とも。

はやくこそ六角町のうり魚の。なれぬ先よりかはりはてけれ。
右六角町如何。古歌にも。町をば市とこそよめれ。又六角町ならでも。魚は賣かひてん。い
かさまにも。猶左可勝也。

蛤うり

ひけのあるは。いへの
はちにてさうぞ。
とのほかなる
ひけのなきかな。

いをうり

いをは候。

あたらしく候。

めせかし。

〔との外なるひげのなき哉ィ〕

十六番

引はえて永き夜ながらながめばや。影も白木の弓張の月。

夕暮の山端みればまつざかや。つる〳〵とこそ月はいでけれ。

左。本末ゆみの心ひき合たり。右。まつ坂やつるとは續きたれど。つる〳〵の詞。たゞ詞也。以左爲勝。

玉札もはねのけらるゝ荒弓の。をしかへしても人ぞ戀しき。

たのまめや人をば獨ふせつるの。きれぬ契とおもはましかは。

左。はねのけらるゝといふ。又たゞことばなり。右。ふせつるのきれぬ契。よくきこゆ。可爲勝。

弓つくり

此ゆみはつるを
きらはんずるぞ。
にへおり。大事
なるへき。

つるうり

つるめし候へ。
ふせつるも候。
せきつるも候。

十七番

秋うるしぬる夜はいかにわれひきれ。はけめは白き村雲の月。
かくばかりまどかになりて。照月の赤かはらけのわれぬよもかな。

左。さるとは聞ゆるを。はけめと云や。たゞ詞ならん。絶まといふべきを。ひきれに引れていへるにや。右は。滿月をよめり。赤土器のわれずもがなとねがふもげにと聞ゆ。かの好忠が古風。いさゝか殘れるにや。右。勝たるべし。

我戀はきはすのはてのうりひきれ。ぬるかとすればいそぐ別路。

あしさまに取落しつる。かはらけのわれてくだけて物おもふ哉。
左。志はすのいそがはしさに。なま壁のひきれは。さもと聞えたり。右。五文字いかにぞや
聞え侍れども。末の句をはらめるもあしからず。われてくだけて物思ふ戀の心。猶宜に
よりて爲勝。

ひきれうり
これはいなば
かうしにて候。
めせ。

かはらけつくり
赤かはらけは
めすまじきか。
かへりわしにて
やすくこそ。

十八番
うり盡すだいたう餅や。まんぢうの。聲はのか成夕月夜哉。
夏まではさし出ざりしぼうろみそ。それさへ月の秋をまるかな。
左右ともにさせる事なし。可爲持。
思ひわび千度悔ても。まんぢうの殘るべきなを猶つゝむ哉。

うとくのみならの都のぼうろみそ。ほろ〳〵とこそねはなかれけれ。
左。くひても殘りをつゝむと志かり。右は。今すこし戀の心まさるべくや。

まむぢう賣
けさはいまだ
あきなひなき
うたてさよ。

ほうろみそ賣
われらも。けさ
ならよりきて。
くるしや。

十九番

すきかへし薄墨染の夕暮も。あら紙色に月ぞいてぬる。

一か二かめも消はつるつぶれさい。それだにみゆる秋のよの月。

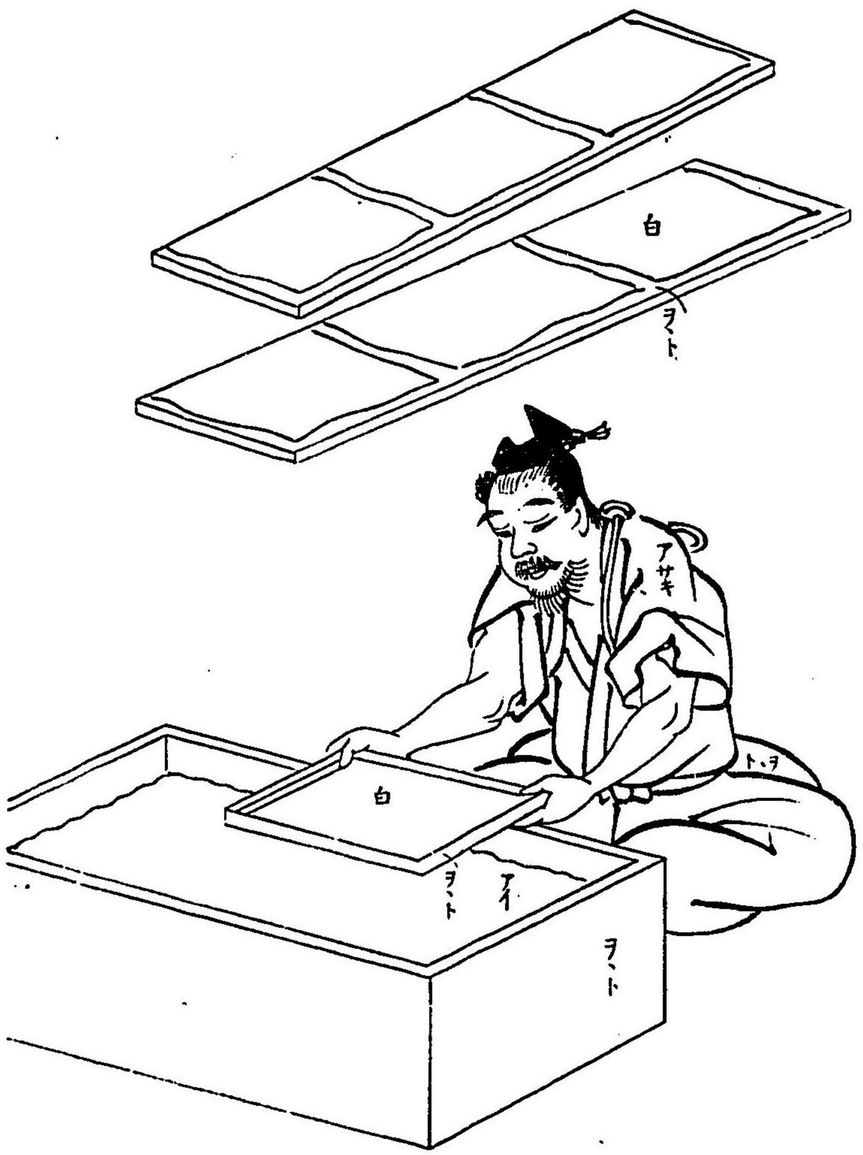
左右ともに。我道をふかくいひたて丶。あかも月をもてなせり。なずらへて爲持。

忘らる丶我身よいかに。ながみの薄き契はむすばざりしを。

ぬたやげにかたづきしたるえせさいの。かくかひもなきめをもみる哉。

左は。奈良紙のうすきといふばかりを詮とよめり。右は。始をはりこゝろざしをのべて。ち

からいれるさまなり。などか勝侍らざらむ。



かみすき

さゝや

かしが

たらぬ

げな。

さいすり

さしちがへのさいも
めし候へ。いぬを物の
いきめも候ぞ。

二十番

此ころのならひ成けり。町かふと。星みえぬまですめる月影。
嬉しくもひきれにしたるつきの木の。月のかけぬをこよひみる哉。

兩首ともに。あしからずきこゆ。仍爲持。

去返しをむくひはいさや古餌。されば〳〵てこそわかれはてぬれ。
今は我きれはてぬるを。さても猶。ろくろの繩のひく心かな。

左右となる難なし。あながちに毛を吹て。きずをもとむべからず。又持とす。

よろひざいく

ちかへしの物は。

さね

かしらが

そろはで。

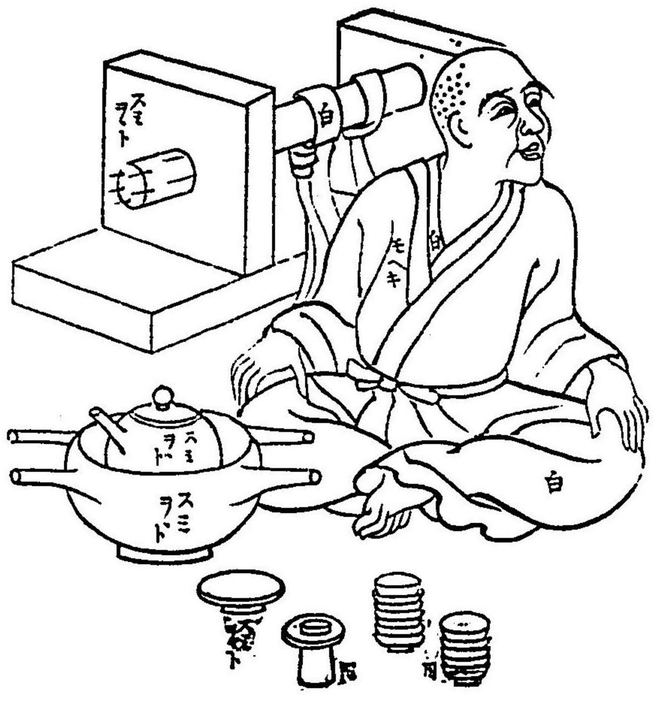
ろくろし

木がたらで。

いそぎのもの

をそくなる。

いかゞせむ。



廿一番

とがむべき人もあらじな。あげゝはき。雲井の月をのぼりてやみん。

畳なれやよはの月ともいかゝ。ゆわうはゝきの塵も曇なき哉。

左歌。衣かつぎ御所侍などは。中々あげゝはきて。恐なきにこそ。草履作の身のほどもしらず。昇殿の思も哀なるべし。右。ひるなれやとて。よはともいかゝゆわう箒の塵も曇らぬなど。長々言下せる。優ならざるにあらず。同科にや。

暮ごとにざうりやめすといひなして。人のあたりに立ならすかな。

我戀とゆわうはゝきのいつとなく。離れぬ中とおもはましかは。

左も。右も。さることと聞ゆ。是又勝負なかるべし。

ざうりつくり

じやうり〳〵。

いたこんごうめせ。

硫黄箒賣

ゆわうはゝき〳〵。

よきはゝきが候。

廿二番

げにふらば又もきせなん。そのほどは。あまげの月の笠ぬがせばや。

山風の落くる露の古あしだ。かたはの月は木のま成けり。

左は。月にむかひて。雨けをよめり。歌合の故實なきにや。歌ざまはよろし。右は。心詞よくかなへり。木のまの月のかたはもみる心地す。可勝也。

いつしかに我にみえじと。かくれがさ。さしもへだてぬ心なりしを。

獨ねの身は我なれや。さしあしだ。二めみつめもあればこそあれ。

左は。歌ざまゆう〳〵と聞ゆ。右は。逸興あり。第三句大事なるべきを。さし足と續けたるも捨がたし。可爲持。

傘張

えのあ

ぶらが。

たらぬ

げな。

あしだつくり

めのゆがみ

たるから。

心地あしや。

廿三番

雪とみて卷あぐるかな。玉すだれ。いとさやかなる秋夜の月。

空色の薄雲ひけと。から紙のきたきらゝなる月の影かな。

左は。かの雪の朝の簾を。月に引かけてよむ。右は。五文字。始てから紙の心強くきこゆ。

よき持なるべし。

人めさへあな恥かしや。やぶれみす。丸ねばかりにあかすよは哉。

ひと心かゝらましかば。ひねのりの何につけても離かたきを。

左。みすのまろね。右。ひねのりのはなれがたき。なにゝつけても。可爲持。

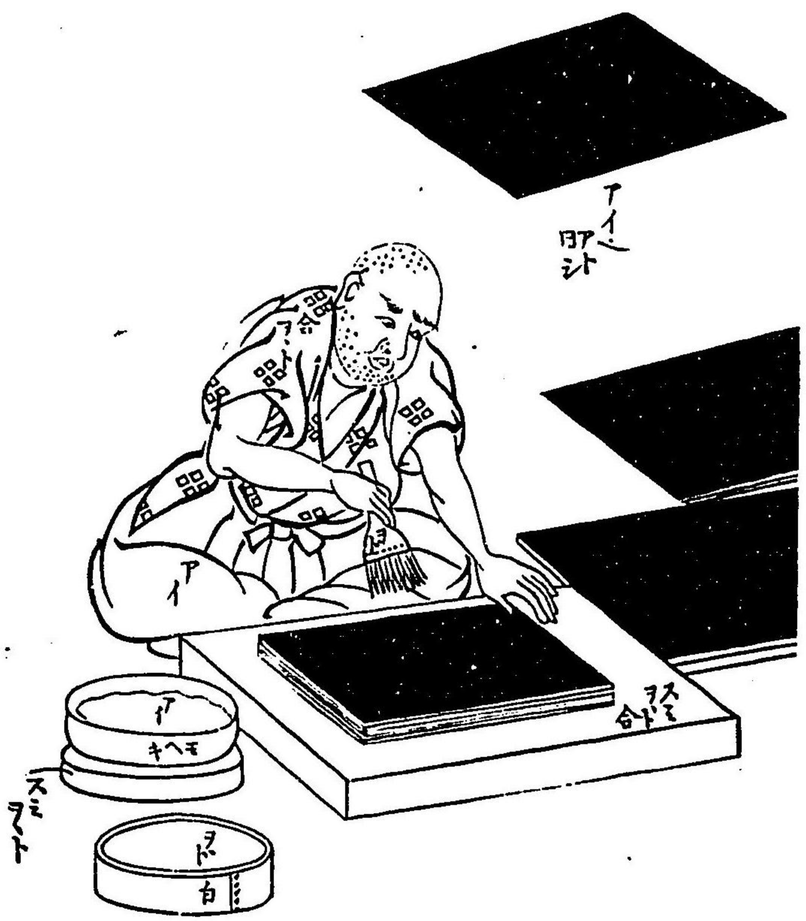
翠簾屋

新御前の
御わたまし
ちかづきて。
いそ
がはしさよ。

イ

この衛殿より。
御いそぎの
みすにて。

から紙し
のりが
ちと
こはければ。
きらゝを
いれよ。



七十一番歌合 中

廿四番

のむ人もおほ水のみにたつる茶の。さもすみはつるよはの月かな。

あたひなきよるをばいかゝせんし物。月みあそびにかふ人もかな。

左歌。のむといふ詞。二あり。もじつゝきたると心得たるにや。病と申べし。右も風情つきて聞ゆ。此煎し物は。左のやまひ歌にのますべくや。いかさま持たるべし。

たつる茶のあはれ消とも。逢との一せにかふる命ならばや。

思ひわびさてもいかゝはせむじもの。戀のやまひの藥ならねば。

左。たつる茶のあはれとつゝけて。一錢をひとぜにとなずらへたる。いとやさしくきこゆ。右は。いかゝは煎じ物。戀の病の藥にならぬと思わびたるも。あはれにきこゆ。なを持に侍るべし。

一服一錢

と葉の御茶

めし候へ。

煎し物賣

おせんじ物〳〵

廿五番

ね覺してあな面白といふ聲に。月さゆるよを空にしる哉。
月影のさゆるもまらずめくらきは。秋の物うき涙なりけり。

左は。目のみえぬ事を。よせいにてよめり。右は。めくらきとよせたる心ばせ。ともにあはれにきこゆ。可爲持。

吹風のめにみぬ人の戀しきを。軒ばにおふるまつときかせよ。
いかにしてさのみたつ名を。大皷かしらうつまで戀しかるらん。

左は。古歌の詞。あまりになが〳〵聞ゆれど。歌がらあしからぬにや。右は。大つゝみにかしらうつといふこと侍にや。されどいやしく聞ゆれば。まけ侍べし。

琵琶法師

あまのたくもの
ゆふけぶり。おの〳〵の
志かの曉のこゑ。

女盲

宇多天皇に。
十一代の後胤
いとうがちやくしに。
かはづの三郎
とて。

廿六番

志ばしまて造かけたる木ぼとけの。光そふべき夕暮の月。
かまくらや經師がやつの月みれば。浦山かけて澄わたるかな。
左歌。みがきかけたるといひてこそ。光そふはかなふべけれ。右。經師が谷。もし浦山か
からずば如何。志はらく可爲持。
もし我にいだきやあふと。聖天のごとくに人をつくりなさばや。
我戀はふりたる經のすりかたぎ。絶まがちにも成にける哉。

左。あまりにもとめたるすがた見くるし。右。いますこしまさるべくや。

佛師

あみだのざう先
れんげざを
つくり候
おりふし法師ばら
たがひて手づから
仕候。

経師

この巻きり。
いかに
したるにか。
きりめの
そろはぬよ。

廿七番

いかけ地のところ〳〵のきり金の。光ことなる秋のよの月。
秋はげにさすがなりけりかひ刀。さやかに月の光さしつゝ。
左右ともに。月の光とよめり。猶右は。句ごとに一首の心いひあらはして。さすがすてがたし。爲勝。

志たへども我をば人の日にそへて。うとくなしちの絶まがちのみ。
色に出て人に心をくだきかひ。青さめはつる戀もする哉。
左は。ともなくよろし。右は。まとに戀する人の面かげうかびたり。猶勝べくや。

蒔繪士

此御たらひは。
いかけ地にせよと
仰られ候。手まは
よもいらじ

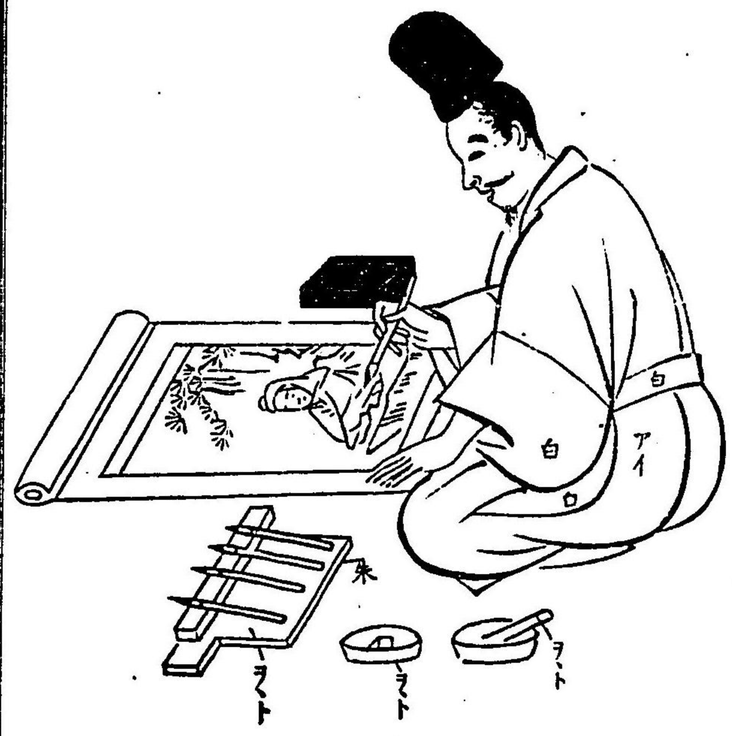
貝磨

この太刀の
さやは。ばく
たいのかひが
入べき。

廿八番

後志ろし嶽の紅葉の下枝より。色どりいつる夜半の月影。
ふくるまで雲井の月にながむとて。冠の影もかたふきにけり。
左歌。たくみにきこゆ。右は。との外に風情つきたり。以左爲勝。

恨めしや。墨繪ならぬに。玉つさの唯一筆に書すつる哉。
くらきよに冠のえいやとられけん。人にえられぬ我思かな。
左。させるなんなくきこゆ。右は。故事を思て。えかもその心あり。いとやさしく侍。仍爲勝。



繪師

すみえは
筆勢が
大事にて候。

冠師

別當どのゝ御
はいかにめさるべき。
御かぶりにて候。
いそがしや。

廿九番

ながむとてたゝずむ庭の月影に。いさとの沓の跡もみえけり。
えほがまやかはらの院の鞠かたの。まろきは月をうつす成けり。
左。ながむるとみるとは。おなじことにや。右。河原院にえほがま月をうつす心。すこしはまさるべくや。
ぬく沓のかさなるとてもいかゝせん。我を思はぬ人の契は。

毛かはりをとりあはせたる。鞠かはの思もあはぬ人に戀つゝ。
左は。ぬぐくつのかさなれるは。妻の外心あるまるし。といふ故事を思てよめる歟。右は
當道さることも侍らめども。歌がらいやし。左。可勝にや。

鞠括

難波殿は。
大がたを御
このみある。

沓造

まりくつは。
はだかなるが
わろきと。

三十番

宵のまはえりあまさるゝ立君の。五條わたりの月ひとりみる。
奥山も思ひやるかな。妻こふるかせぎがつじの窓の月みて。

左右ともに。其道たしかも。あゐて勝負あるべくば。つまこふるかせぎ。より所あるか。可勝にや。

あぢきなや。名は立ぎみのいたづらに。獨ねあかすよはも有けり。
三づ川うばとやつゐになりなまし。地ごくがつじに殘るふる君。

左。名はたちぎみやさしけれども。右。さうづがはのうばはよくよれ〔め〕り。猶以右爲勝。

たち君
すは御らん
ぜよ。
けし
からずや。

よく見
申さむ。
きよ水
まで。
いらせ
給へ。

つじ君

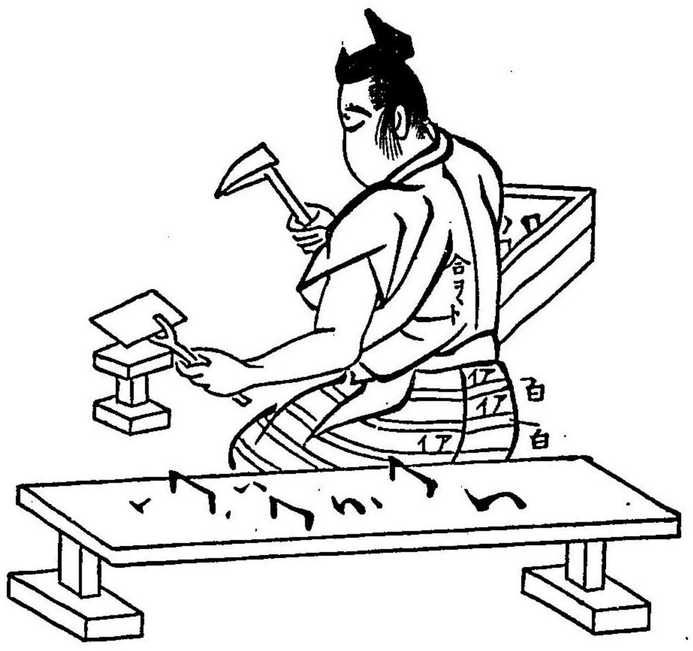
や・上臈
いらせ給へ
お中人にて候
みしり
まいらせて
候ぞ
いらせ給へ

卅一番

眞砂地の月かけみれば。白かねのなゝこ蒔たる心地こそすれ。
池水の月影みれば。ゐろはくの泥になりても光やはけつ。
左歌。みるやうによみたり。右は。始中終よくかなへり。でいにけつなと尤よせあり。可勝にや。
はいらふのたらざりけるか我に人。とろほされしとおもひあはねは。
戀すとて青みはてたるひたちがね。いつ色よしと人にみえまし。
左右ともに。歌ざまいやし。又逸興侍らず。可爲持。

銀さいく

なんりやうの
やうなるかねかな。



薄うち

なんりやうにて。
うちいでわろき

卅二番

月をみば猶ものべばや針がねの。長きよとてもいやはねらるゝ。
いつとなくすゝやのまどの影なれば。ひきいりてのみ月をみるかな。

左右ともに。興なきにあらず。よろしき持と申べし。
情なき人に心をつくし針。みづからなとか思ひそめけむ。
獨ねの身をもはなたでぬきれこそ。我手枕のにしとなりけれ。
これ又よき持に侍り。

針磨

こはりは
みつか
大事に候。

白地松青

念珠挽

かずとりと。
七へんの玉。
むづかしきぞ。

卅三番

幾入のへに皿よりも。秋の月あか〳〵とこそ澄渡りけれ。
水かねやざくろのすます影なれや。鏡とみゆる月のおもては。
左さしても聞えず。月のあかきと。べにの赤きは。かはるべきにや。右も。に世物さると

なれど。月を水かね。ざくろ。いかゞすまさむ。たゞ可〻爲持。
心さへ人のけはひにみゆる哉。さにつらべにの移りやすさは。
うき人のかげだにみえぬ鏡とぎ。わきもすかさで副臥もがな。
左。さにつらべに。尤より所あり。右。わきもすかさぬ故事。又逸興あり。よき持に侍り。

紅粉解

御べに
とかせ
給へ。かた
べにも候へ。

廿四番
風心地あればやゝがてつくしやみ。雨氣の月の晴そめにける。
みぬからに今宵の月は晴ぬべし。ゆふげの風を占方にして。
左は。歌のやまひはなくて。こしの病あり。右は。月にむかひたる心すくなし。可〻爲持歟。

鏡磨

ざろみの御
かゞみは。とぎ
にくゝ侍。

あはれ我懇の病そ藥なき。うき名ばかりをたち物にして。
こひ路にて後もや逢と。心みに。わが人かたの身がはりもがな。
左。藥なければ。たち物は。よく思ひよりためり。右は。心ふかくて歌がちよろし。負勝。

醫師

殿下より續命湯
獨活散を
めされ候間。たゝ今
あはせ候。

陰陽師

われらも今日は
晦日御祓
持參候べき
にて候。

卅五番
山陰や木の下やみのくろ米の。月出てこそあらけ初けれ。
まめかくるさはりもいとゞまさる哉。せとの高木の葉がくれの月。
左右共に。歌樣も。作者の品に似たり。可負持。
懇せしと神の御前にぬかづきて。さんくの米の打はらふ哉。
こひすればやせちのまめのさるなかせ。涙の川は我ぞましける。

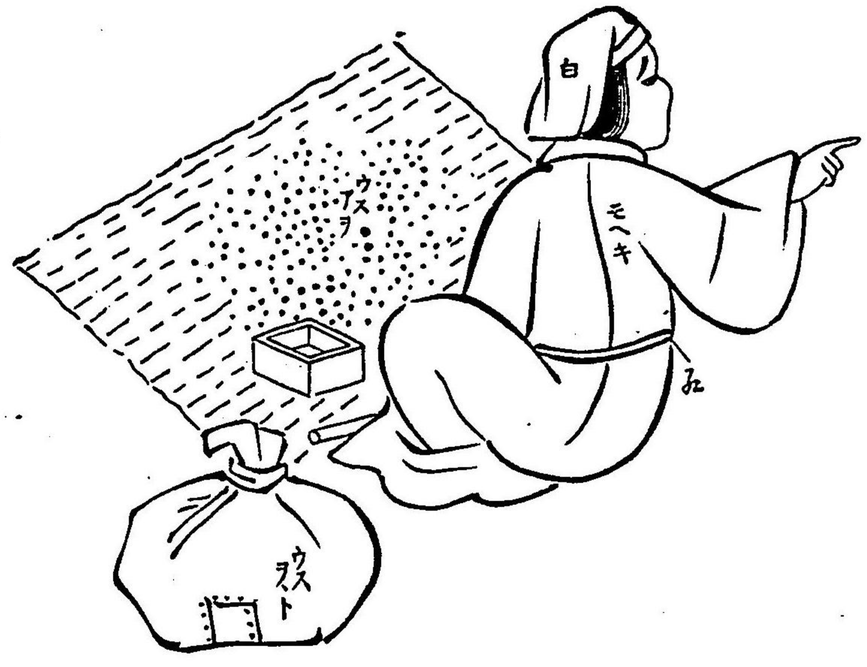
さむくのこめのぬか。さるながせましなど、へつらへるさま。うるはしきすがたならず。
猶持にや。

米賣

なをこめは候。
けさの市には
あひ候べく候。

まめ賣

われらが
まめ
も。
いまだあき
なひ
をそく候ぞ。



卅六番

文字はよし。みえもみえずもよるめぐる。いたかの經の月のそら讀。

人ながら如是畜生ぞ。馬牛のかはらのものゝ月みてもなぞ。

左。伊たかの經のやうに。空よみとこそいへ。是は經の月とつゞけたり。よらずや侍らむ。

右。馬牛のかはら。ことによろし。可勝なり。

いかにせむ五條の橋の下むせび。はては涙の流くわん頂。

忍び妻たゝずむよひの門の犬。えたに別の人をとがむる。

猶右勝侍べし。

いたか

なかれくわんちやう

ながさせたまへ。

そとばと申は

大日如來の

三摩耶形。

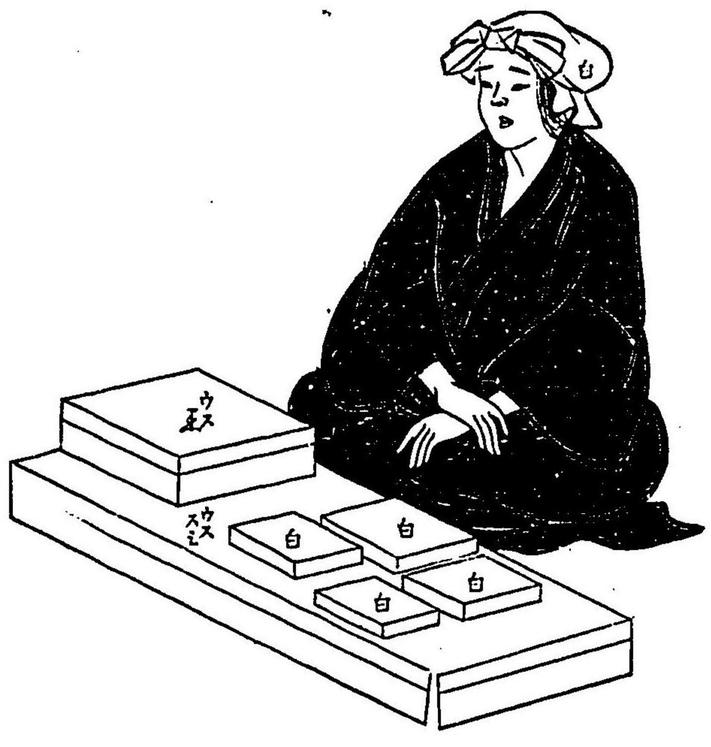
穢多

このかはゝ
大まいかな。

卅七番
故郷はかべのとたえにならどうふ。白きは月のそむけざりけり。
てうさいのこしきの上のあつむぎの。むしあけのせとの月渡るみゆる。〔一字衍〕
左。何となく宜し。右も心はめぐれり。されども。こしきの上と。むしあげとおなじ。文字にや。よりて。左を勝とす。
戀すれば苦しかりけり。うぢどうふ。まめ人の名をいかでとらまし。
我戀は建仁寺なるさうめむの。心ふとくもおもひよるかな。
左。うぢどうふ。まめとよくつゞけたり。まめ人のと兩説有にや。實ある人とも云り。かの源氏の夕霧の大將は。まことしきによりて。まめ人の大將といへり。一義には。ぬしある人を夜ばふを。まめといへり。此歌はいづれにもかなふべし。右は。第二の句とはし。
左。勝べきにこそ。

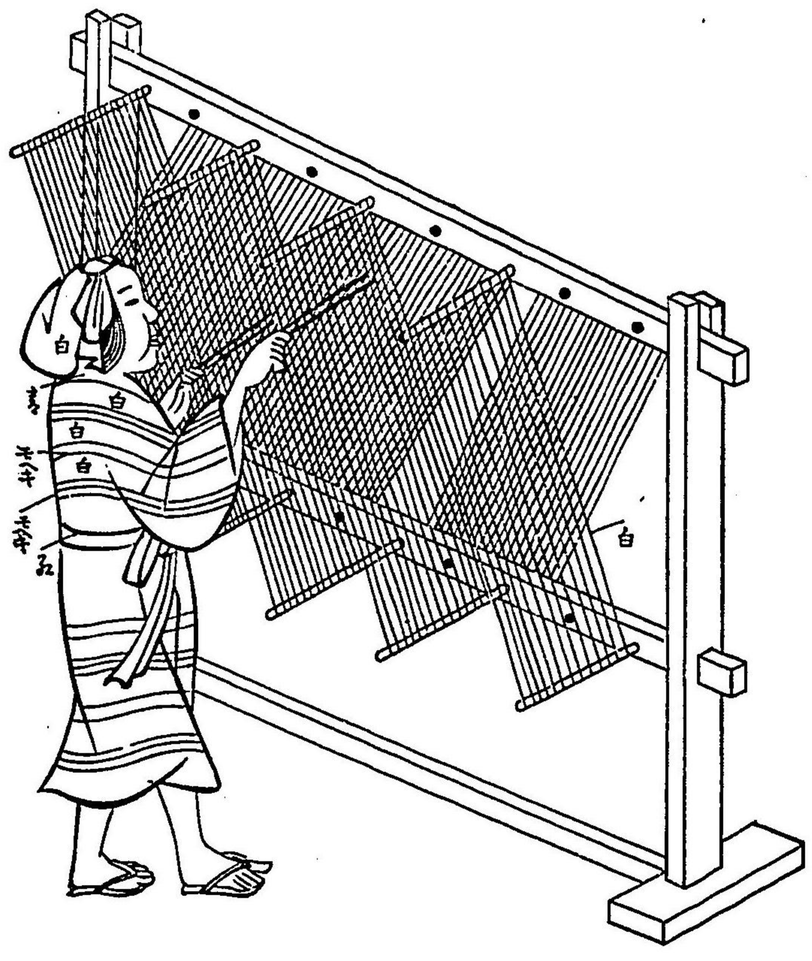
豆腐うり

とうふめせ。
ならより
のぼりて候。



索麵賣

これはふと
ざう
めむにし
たる。



卅八番

あきなひの秋のあたひも高潮の。今宵そ月の名をもうるなる。

西京やかうちのむろや垂こめて。月のよごろをよそにみるかな。

左右歌ざま。おなじほどに見侍るにとりて。むろやをたれこめたらんよりは。名月こそ勝侍らめ。

思ひ初るむねのやきての鹽けぶり。なびきなびかずせめてとはじや。

戀すれば足もとよはし。麹賣。たふれあやうや火事出すな。

右依有興可爲勝。

鹽うり

きのふのくれ
　うりの
あたひまで。けふ
　たまはる人もがな。

麹うり

上戸たち
御らんじて。
よだれながし
給ふな。

卅九番

軒の露玉屋の月の影みれば。みがゝずとてもとたりぬべし。
かきのから月かげみれば。土左石のほしの光はすくなかりけり。
軒の露玉やといひ。かきのから月かげといひ。ともに金玉をみがき出たり。よき持なるべし。
繰かへし悔しき物を。片思。おもひの玉の數かぎりなく。
逢事は猶かたければ。硯いし。金剛志やうもかなはざりけり。
左は。首尾やさしくよめり。右は堅ければ。こんがうしやうもかなはざるらむ。とはりは。
能聞えたれども。第四の句あまりにとはくきこゆ。仍左勝べくや。

玉磨

是はちかごろの
玉かな。火をも水
をもとりつべし。
念珠のつぶには
あたらもの哉。

硯士

じやくわう寺は。
しろみかたくて。
きりにくき。

四十番

紅葉せで秋も萠黄のうつぼ艸。露なき玉とみゆる月哉。

月に寢ぬとうしみ賣の身の業を。誰聞まらぬいびきとかいふ。

右歌。心詞能。調ふりて。殊に源氏物語槿の巻にや。程もなく。いびきとか。聞まらぬ音すれはといへる詞も。此燈心によく引出られて。飽に聞え侍。左歌。露なき玉と侍。疑無にあらざれ共。水晶の葱なども申侍れば。不可有難歟。准て持と可申や。

戀といふ一もじゆへにいかにして。かきやる文のかず盡すらん。

とうまみの契やすきをためしにて。いざゝば人を先引てみん。

左。一文字故に。とばかり云て。此題に叶べしとは心得侍らず。右。尤巧にして。凡骨更に及がたし。左を顧に不及。右に肩ぬぎ侍べし。

燈心うり

四十一番

月のきる雲の衣をうり物や。さふらふといふ人もかはめや。

藏まはりたゝいたづらに。くるゝ戸の。あけぬ夜深き月をみる哉。

左右ともにさせる難なし。可ㇾ爲ㇾ持。

思ふと人に傳ふる道ならで。おようや有といふはよしなし。

戀衣袖をかへばや。藏まはり。絶す涙のながれ物とて。

左は。よその人の詠歌ならば。尤もさもと聞ふ。作者の身にて。歌の意たがふへし。右。袖をかへばや。ながれ物。さもと聞ゆれど。是も袖をかへばやといふいかゝ。袖をかへよなど詠べきにや。取合て爲ㇾ持。

すあひ

御ようや
さふらふ。

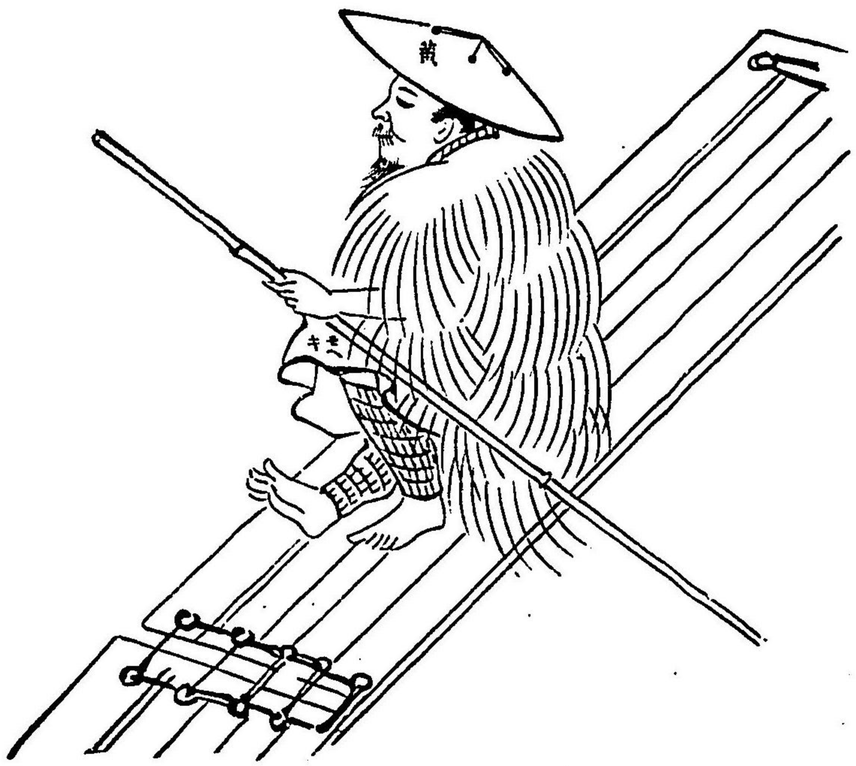
藏まはり

御つかひ物〳〵。

四十二番
大井川流につるゝ。いかだしのくれ毎にみる月のさやけさ。
出やらでいとゝ心を筑紫櫛。はわけの月に山風もがな。
筏の。さして難なけれども。薬分の月に山風をねがふ心あり。以右爲勝。
山國やゑせ木のくれはかさなれど。きらはるゝみは獨こそおれ。
いかにせん逢ことかたきゆずの木の。我にひかれぬ人の心を。
左右ともに。いとはるゝ戀の心。おなじかるべし。仍爲持。

筏士

此ほとは水
しほよくて。
いくらの材木
そくだしつらむ。



櫛挽

先これはかり
ひきて。のこ
ぎりの
めをきら舞。

四十三番
秋寒き閨の戸口の杉まくら。さしいるからに月ぞ身にしむ。
山端にいさよふ雲のをしくゝみ。月にへりある秋の夕暮。
左歌。さるべかしう聞ゆ。右は。雲の匂ひて。月にへりの有様にみゆると。さもとおぼえ

たれど。いさゝかをしつけたる詞。わたくしにたり。左勝べくや。
むろ出しまだひもやらぬ新枕。かふれかゝりてそひもはてばや。
綱ふすたゝみのうらのかくし針。人にさられぬ戀もするかな。
左。漆にかぶれかゝる折なれども。右。隱し針。人にさられぬ。當道の秘事とかや。戀のさし續き能聞ゆ。右可勝。

枕賣

今一のかたも
持て候。ひそかに
めし候へ。

疊刺

九條殿に何事の
御座あるやらむ。
帖をおほくさゝ
せらるゝ。

四十四番

えばし只うつふせ〳〵しめ瓦の。あふげばこそは月もみえけれ。

名にしおはゞ我こそはみめ。笠縫の。うら淋しかる秋夜の月。

左。かはら葺の才學。猶入たゝぬ月也。右。まことに。作者の名におふ浦の月より所あるか。右可勝。

いつまでや限ならまし。瓦屋の下焼むねをえる人はなし。

見えしとや。うちかたぶくるつぼね笠。すげなげなるはうらめしき哉。

左右おなじほどなれども。右は。すこしふるまゝるさま。まさるべくや。

瓦　焼

南禪寺より

いそがれ申候。

笠縫

世にかくれなき
かさぬひよ。

四十五番
浮雲の晴もやらねばさや卷の。引こみがちにみゆる月哉。
夕まぐれ山かた近き。三日月のまがりながらに入ぬべきかな。
左は。いさゝかされ歌に似たり。右は。とばつゝきやさし。可ゝ爲ゝ勝。
我戀はまりさや卷のあれすのこ。ぬる人のこぬ身をいかにせん。

いかにしてまつ人くちに乘ぬらん。志らほね鞍のぬるよなき身に。
左右たくみにて。歌さま猶狂歌なり。ともにうるしほしげなり。可ゝ爲ゝ持歟。

鞘卷きり

當時はやらで。
得分もなき
細工かな。

鞍細工

あら
ほねおれや。

四十六番

法の月廣くすまして。武藏のに起ゐる暮露の草の床哉。

住吉の入江の月や。故郷の姑蘇城外のあきのおもかげ。

暮露の心。月いる酢の法の光をか廣め侍べき。信仰もなく覺ゆ。右。住の江の月に對して。

名高き楓橋のわたりをも。我故郷と云出たる所。他人のをよばざる風躰。かの仲麿が三

笠の山の月にも澄增りてこそ侍らめ。

いとふなよ。かよふ心のむまひじり。人の聞べきあの音もなし。

唐大和まるべするみのかひぞなき。思ふ中には言かよはさで。

右は。只よの常のとはり聞えたるのみ也。左の。馬聖は。あの音せず。ゆかん駒もかとい へ

る。万葉の古風も。よりきたりて。神妙に侍り。尤可ゝ爲ゝ勝。

暮露

通事

七十一番歌合下

四十七番

月にだに勸學院のもんぜむは。立入道の人ぞ稀なる。

をしはかるこあてだにになし。夜引目のいる方暗き月のあたりは。

左。まことに文者の作とおぼえて。とばやはらがずとも申がたし。文選を門前によせたるも。ついでに稽古の人のまれなる述懷の心も。おもしろく聞ゆ。右も。詞こはし。げにもつよき弓とりのわざなり。されど月の歌に。いるかたは心なきに似たり。以左爲勝。

とくにつくさいはひなれば。びんしけん。薄き衣は人もかさねじ。

雁股の二道かゝるものねたみ。矢先は胸をとをすかひなし。

左も。右も。ことばやはらがざるは道にかなへり。歌のこゝろは。ともにこひの述懷なり。

よき持なるべし。

文者

六韜の末は。

むねと武道。

にて候。御稽古も

候へかし。

弓取

運は天にあり。
命は義に
よりて
かろし。

四十八番

鼓うちみはやしけるもいちじるく。月にかなづる白拍子哉。
くせ舞の月にはつらき。小倉山その名かくれぬ秋のもなかを。

左。させるふしなき歌なるをや。當世曲舞に。月にはつらき小倉山。その名はかくれざりけりといふ音頭を。思よせたるにや。道によりてかしこければ。爲勝。

忘れ行人もむかしのおとこ舞。くるしかりける戀のせめかな。
車にて袖打ふりしまひ女。かゝる戀すと人はしりきや。

左。昔の男舞。戀の責など。歌めきたるに。腰の句つゝかずきこゆ。右は。袖うち振しといひて。ありきやといひとぢめたるは。彼光源氏の歌を思へる歟。やさしく侍るを。をのが名を顯はして。かゝるといへるや。あまりならん。少左可勝也。

白拍子

所〳〵に
ひく水は
山田の井ど
のなはしろ。

曲舞々

月にはつらき
をぐら山。その
名は
かくれざり
けり。

四十九番

月見つゝうたふはうかのこぎりこの。竹の夜聲のすみ渡る哉。
むしやう聲入きけとてそ。瓢箪のきは〳〵めぐる月のよねふつ。

左右。夜こそ。念佛。おなじほどの事にや。
やぶれ僧えぼしきたれば。こめらはの。男とみてやきりにつくらん。
うらめしやたがわざつのそ。昨日までこうや〳〵といひてとはぬは。

左は。さもと聞えたり。みるやうなり。右は。はちたゝきの祖師は空也といへり。わさつのも此道ぐといへり。されど歌の逸興猶左にあり。

放下

うつゝなの
まよひや。

タニサク上青下エンシ二ツ共同

鉢　扣〔可〕

昨日みし人
けふとへば。

五十番
田樂のちうもむくちの透れんじ。のぞくぞ月の細め成ける。
秋の霜翁おもての白髭の。ながきよわかす月をみるかな。
左は。首尾いひかなへり。右は。上句事ありといひたてゝ。長夜月みるとばかりは。少し
末よはく聞ゆ。左可勝。
よそへても。げにぞ戀しき。人まねのおほひかつらの女すがたを。

戀られてむくひやすると。ゑめい冠者うつくしげなる人とみえばや。
左右ともに。我道のすがたをかりて。戀をよせたるこゝろばせ。やさし。仍爲持。

でんがく

猿がく

あげまきや
とんどう。ひろ
ばかりや。とん
どう。

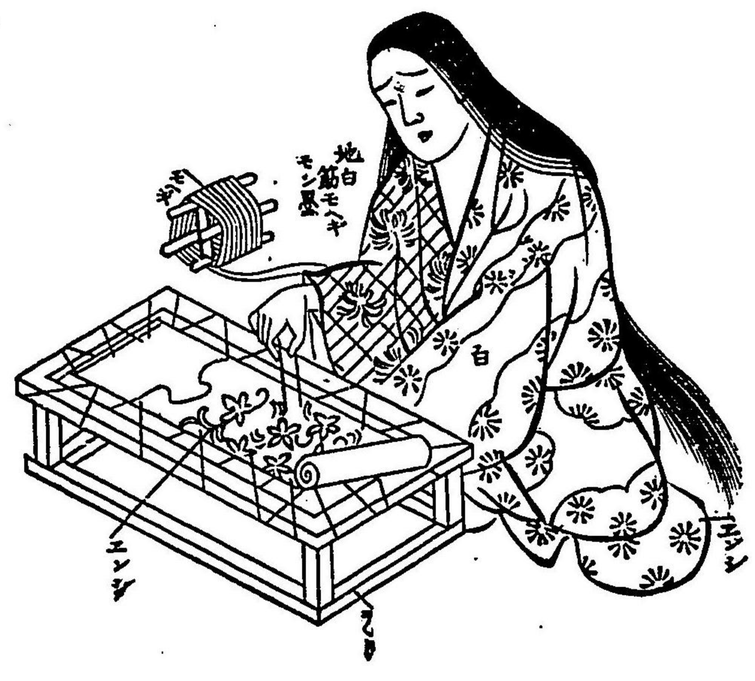
五十一番

繪の裏薄やうの紙までも。すきかげ白くすめる月哉。
やおもてにまばしみえつる。月影のせとに成まで。更めぐるかな。

左。繪のうらに薄様すきたるまで。さやかなる月。いとめでたし。右は。又組にや。おもて
といふ組を。家の面に寄て。せとまで月をめぐらす心ばせ。よき持なるべし
さしも我ちぎり置しを。今宵又誰とぬものゝいとも恨めし。
戀しぬときく〳〵なをもさまでやと。我をゝしきに人のいふなる。

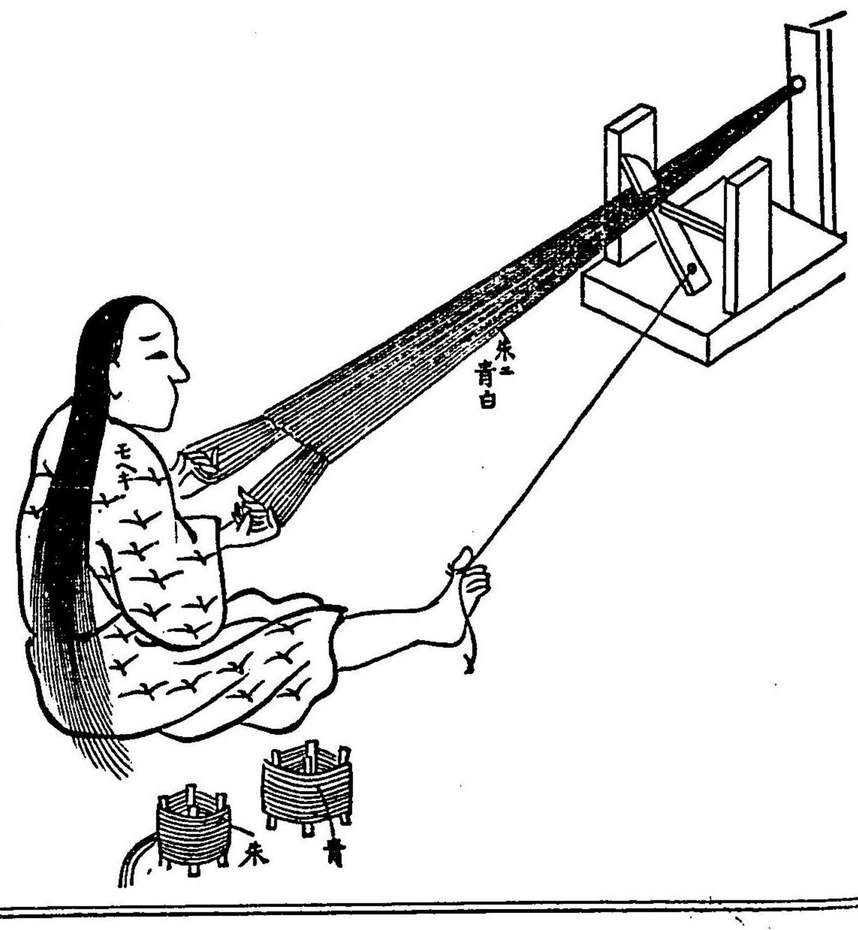
左。誰とぬものゝいとと云ゝる。さま宜し。右。首尾かなゝり。ゝし木とは。くみの具なめ
り。詞にゝしきといふは。たゞ言葉也。されどよくよせたれば。猶爲レ持。

ぬひ物ゑ



組し

たくふくは。
この比めす。
人もなき
うたてさよ。



五十二番

明らけき月とはみれど。さすが猶ほりめはくもる摺形木哉。

たゝう紙みがき打たる切はくの。光となる秋のよの月。

ともにさせるとなし。可爲持。

あびずりの花田にまじる深むらさき。いづれにうつる人の心ぞ。

忘めや。き殿に染るたゝうがみ。あなやか成りし人の手ざはり。

左右ともに。歌仙のうたともみえず。ふところせばし。可爲持。

すりし

梅の花ばかり。

するほどに

やすき。

五十三番

四十九おてんやにみゆるうりつゝら。さし出はめる軒の月影。
月見つゝいたづらふしのなきまゝに。よの程造る竹かはご哉。

左。風情盡て聞ゆ。見ぐるし。右は。ふしよなど竹かはごによせあり。すこしまさるべくや。

葛籠造

我戀はまたさらされぬ青つゝら。くるとはすれどされしよそなき。
逢事の玄ゆくせぬ柿のさねかはご。ちぶ〳〵にだに人のこぬかな。

左の歌。つゝらにさねといふ物侍るや覽。未分明ならず。右。熟といふ詞。こはけれど。柿のさねかはご熟しなど。緣の言葉にや。さねのと聞さだめんほど。先爲右勝。

御たゝうがみ
めせ。色もよく
いできて候そ
とよ。

皮籠造

このかはごは
人のあつ
らへ物
にて候。

五十四番

なかむとて我さへめをそひねりぬる。のためがた成在明の月。
ねやのうちに枕かたぶけながむれば。さかつらにこそ月もみえけれ。

左右。非無興。左勝べきを。在明は月の歌に心なきにゝたり。仍爲持。
のこゝろも更にかはらで。一手矢のおなじふしにはいつかなれまし。
人心うけをかけ緒もをきれはてゝ。腰はなれたる古えびら哉。

右。猶たくみなり。仍爲勝。

矢細工

これはちくの
とてあつらへ
られて候。

籠細工

さかつらか
なくて。柳
をひらに
する。

五十五番

くり鉋かたいりたるやぶれめの。其まゝにすむ引めやの月。
秋深き星はくもれど。むかばきの白毛の月のさやか成哉。

左右ともに。よろしからず。可負持。

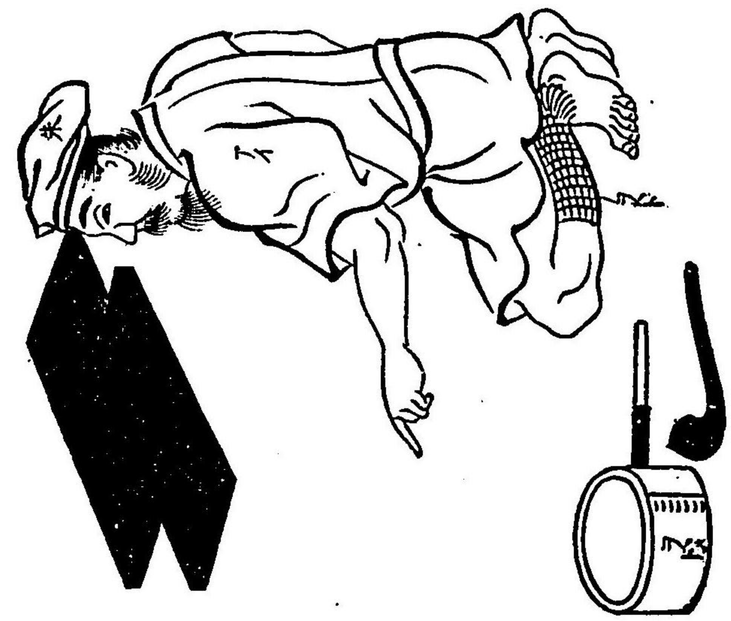
我戀はかさかけひきめ塗こめて。いとめもみえずなく涙かな。
厭ても逢瀬やあると町人の。むかばきがはのなでものもがな。

左右。猶無風情。負持。

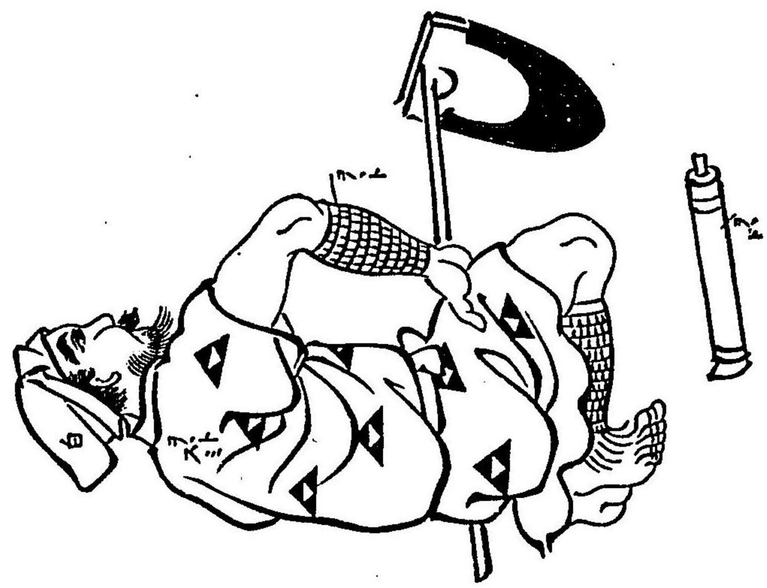
むかばき造

あはれ御
むかばきや。
けいろもよし。

五十六番
ながむとて金もほらぬ。つんさひのさびてそみゆる秋夜の月。
みつかねの草に置かとみゆる哉。露にやどれる月の光を。
左歌。月みるとて。金ほらねば。つんさひのさびたるらん。とはり叶て聞ゆ。つんさひと
は。金ほる具足にや。右も。にせ物によみかなへたれど。強て申さば。左可勝也。
一棹にあまるこがねのおもばかり。幾目ともなく人ぞみらるゝ。
あちきなや。にぶのみ山にほるかねの。みつから人に思ひいりぬる。
左歌。たくみ也。右。水とかねとを二にいひきりて。題のこゝろおもひ入たるにゝたり。仍
爲持。



金はり



赤はり

五十七番

大鯉のかしらを三にきりかねて。片われしたる在明の月。

よもすがらあすのてんぷんいそぐとて。心もいらぬ月をみる哉。

左右ともに。吹毛の難も侍れば。歌がらさせる事なきによりて。爲持。

こひ故に庖丁刀はをみれば。ほろ〳〵とこそねもなかれけれ。

いかにせむ。こしきにむせる饅頭の。思ひにくれて人の戀しき。

左歌。庖丁には。魚も。鳥も。いくらもよせ有ぬべきを。二首ながら鯉をよめる。才覺なきにゝたり。せめて甑の饅頭のふくるらんは。才覺少し侍り。可勝。

はうちやうし

てうさい

さたうまん
ぢう。さい
まんぢう。
いづれもよく
むして候。

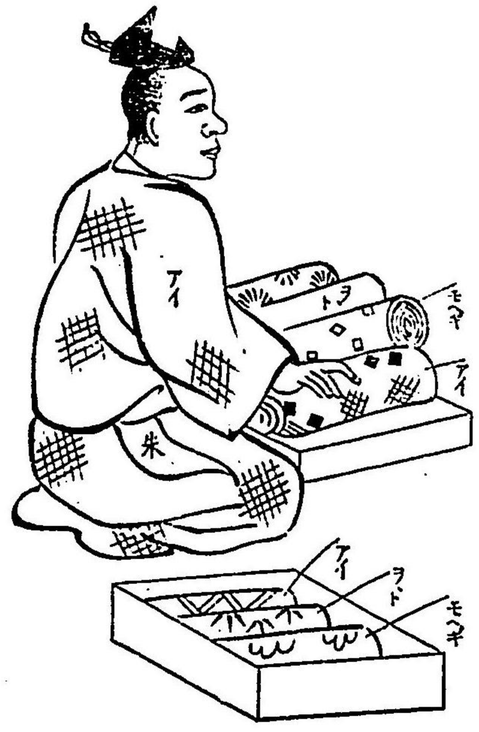
五十八番

一筋の霜かとぞみる。賤のめがをる麻ぬの〻月の夜さらし。
雲まきの町ひた〻れのすきかげの。さしてさはらぬ月の袖笠。
左右共に。さる事ときこゆ。よき持にて侍べし。
されば とて人もすさめぬ。布織の我手つくりの戀もする哉。
忍びあまる涙をいかにつ〻まゝし。まち直垂のせばく短や。
左。我手つくりの戀。よく布におもひあはせたり。右は。歌もはたはりせばくきこゆ。以
左負勝。

白布賣

ましろぬの
めせ。なう。
はたはりも。
しやくも
よく候ぞ。

直垂うり



五十九番
賤のめが絲にするてふ麻のをの。よるとみぬまですめる月哉。
一村も疊るとみゆるめなし綿。おなじ色なる月のさやけさ。
右。めなし綿は。きはめて白く。きらの侍とかや。されどあさ絲の歌。心ひくすぢなり。以
左爲勝。
櫻麻の思ひおもはず。いかにして。人の心をかなひきてみん。

我戀の心一つにまのぶ綿。つみしらすべき便なければ。
左歌。かなひきはよき苧といへり。右。又しのぶ綿。ともにすてがたし。よき持たるべし。

苧賣

ちかきほどに。又
を舟とをり
候べくは。
いかほども
めし候へ。

綿うり

わためせ〳〵。
まのぶわた
候ぞ。

六十番

夕まとひする人もなし。かなうすの月の夜聲のかしがましさに。
月ばかりめにかけてこそわかしけれ。よるは藥の賣かひもなし。

左。梅が枝の卷に。かなうすのをと。耳かしがましき比なりといへるも。月の夜こゑによそへられて。やさしく聞ゆ。右は。はかりを。かくし題によまれたるにや。されど。左歌には。かけても及がたし。可爲左勝。

我爲のにほひにもせば。たき物のおよとやあるといひやりてまし。
藥うる唐人とてや。戀しとも。いふ事をたに聞もまらぬに。(はイ)

此番。さしても聞えず。薫物も。藥も。取合て爲持。

薫物うり

隨分此かうども。
えりとゝのへ
たれば。
この夕暮の
志めりそ
おもしろき。

藥うり

御藥なにか御用候
にんじん。
かんざう。
けいしん候。
ちんも候。

六十一番

あはれわが心すむべき便かな。時しも秋の月の峯入。
立かへり猶やながめむ。東路の三のおやまの月のたびく。
左右ともに。行者の心をよめり。歌ざまもおなじほどにみゆ。可爲持。
先だちのさんきさむげは我やせん。いたの目につくむしのまた哉。
いかにしてけうとく人の思ふらん。我も女のまねかたぞかし。
左右の作者。名をあらはさずして。おかもそのことゝきこゆ。是又おなじ程にや。

山伏

是は出羽の
は黒山の客僧
にて候。三のお
山に參詣申候。

地しや

あうおんかな〳〵。
二所みしまも
御らんぜよ。

六十二番

さいはいや高天の原の秋の月。とがてふとがの雲拂ひませ。
神歌や鈴ふりたつる聲までも。月澄わたる里かぐら哉。
左歌。中臣祓といふ詞を。やがて月の所によめる。興あり。右は。神歌と。神樂とおなじ言葉成べし。歌合には故實なきにゝたり。仍左可勝。

我戀をいのると人のきゝやせん。さゝやき聲に乃「のり」と申さん。
かけ帶の長き契りのかひもなし。志めの外なる人と成つゝ。
右歌。よしあるにゝたれども。左。さゝやきごゑのゝと。金玉ときこゆ。左猶可勝。

ねぎ

たかきの原に
神とゐまり
まし〳〵て。

かんなき

神はやたち
まふ。
袖のをひ
風に。

六十三番
暮るまで待をくれたるきほひ馬。心ならずや月にのるらん。
影法師みぐるしければ。辻すまふ。月をうしろになしてねる哉。
左右ともに。心詞くみあひたるけい馬すまふなれば。勝負ありがたし。よき持たるべし。

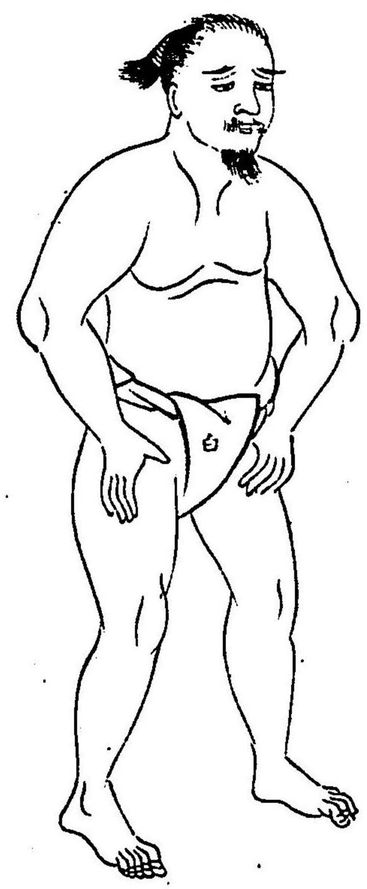
おい馬のをくれはてたる我なれや。取つきがたき戀もする哉。
わが戀はさつまの氏のおさなれや。かたてにだにも逢人のなき。
左右おもしろくきこゆ。猶氏は。かの氏おさが。あふ人のなかりけん。よくとりよれり。可
勝。

競馬組

むかしは上さま
にもてなさ
れし
事の。今はこの
氏人のみに
のこりて。

相撲取

道のおもひ出に。
相撲の節に
めさればや。



六十四番

眠らねばきやう尺までも無りけり。さやけき月ゑ伴道にして。
觀念の月あきらかにみるまでは。我行ひもさい大じかな。

右は、座禪のゆかに影みるらむ他念こそ。經釋もあたりぬべけれども。月を翫心尤ふかし。右は。寺の名によせて。我宗をあらはす許也。左には及がたくや。
戀しさのたゞ本性を盡さねば。べちに障碍のなきはなきかは。

中々に我なすゝめそ。邪婬戒たもつやいなや戀は忘し。

左は。戀すれども。猶本性をなげきたり。右は。なを戒をやぶらんの心深し。罪のすゝむ所。いましめ深きによりて。猶左可勝。

禪宗

二

文字の上にをきては。御不
審たつべからず。若如何と
ならば。口をひらかずしてとひ
きたれ。

一

けうげ別傳と
申候は。
などや祖師とは
仰候ぞ。

律家

六十五番

蓮葉のにごらぬ露にやどるなり。是ぞ上品上生の月。
我法の月ぞてらさん。末の世の。よ經しちめつさもあらばあれ。
左右ともに。我宗旨をあげたり。法の勝劣を論ずべからず。
往生のさはりもぞする。先人を。くはん音せいし來迎も哉。
一目みてわすられざりしおもかげは十羅刹女もかくやとぞ思ふ。

是又ともに觀音勢至を使とし。十羅せつ女を思懸たり。且恐なきにあらず。光源氏の物語にも。法けたちくすしからむと申めり。左右ともに。不可然。

念佛宗

即便往生も。たうとく
往生も。只一たび南無と
となふれば。極樂に生。
なにのうたがひかあらん。
南無阿彌陀佛々々。

末法まんねん。よ經
ましめつの時。此妙法
花と申候は。我等が
祖師日蓮上人の
御時。くれ〳〵とかれ候
ときは。

法華宗

六十六番

秋霧は月すむ山のうちこしも。雨のたぐひにきらふとそみる。
諸共に月にうたはん。げにやさは。今はた誰もさぞ覺たる。
げにや娑婆の秘曲。其興侍り。但げにやさらば無覺たる。誰いひおほせざるにや。左。霧
は降物に打越を嫌新式の心。可然は侍れど。山の打越。只詞にや。彼是を通はして。可爲
持哉。

戀詫て神に手向のつらね歌。逢坂山をふし物にせん。
別路になくかうたふか。かれ聲のまぼりあげたる袖の名殘は。
山を賦物にて。會坂の手向。よき連歌のよりあひ。神明納受の法樂成べし。又袖の餘波の
美聲。近比の早歌の聽聞。耳を驚かし侍り。持とすべし。

連歌し

いまだこの
おりには花が
候はず候。

早歌うたひ

かたみに
　のこる
なでしこの。

六十七番
いつくまや。こねん寺かけて見わたせば。京白川にすめる月影。
初夜中や後やのつとめのひまなさに。みるとしもなき法華寺の月。
左右ともに。我寺々をいひたてたれど。させるとなし。されど左は月をひろくよめり。右
は月を翫ふ心すくなし。すこしは左まさるべくや。

本性をつくさんとこそ思ひしに。べちにしやうげの男おそろし。
男より手わたしにこそとられぬども。つゐに我らを落し文みつ。
左右ともに。ひじりの戀はしかるべからずとも。題によりてよめればさも侍るべし。み
なけさう人の侍るをわらはせり。さんげに罪あさくや。可爲持。

びくに

四

それはよも。
けうげ
べちでんにては
候はじ。

二

佛弟子は。大かたみなさこそ候へども。御尼衆もきげんかいといふ事は候めるは。我らはつとめ行法はおなじ事にて候。さぜんくふうはおなじ御とにてはよも候はじな。

一

御びくにも。かいもんはまもらせ
給ふなれども。などかをん志ゆ
をば御やぶり候そ。

三

我らもくわん念と申すは
さにてこそ候へ。

にしう

六十八番

三の寺觀までだにをよばめや。我山住の月の高さに。

さん論の御法の窓も明らかに。南にめぐる法相の月。

左は。四大寺の中に。我山に及がたきといひ。右は。南都の月をほめたり。共に是非を申がたし。可爲持。

ひえわがる我稱ねのとことはに。いちゝごならぬ人ぞ戀しき。

戀しさにをこなふべきもわするれば。我とくこうのほどぞあらるゝ。

左。一ちご。二山王といふと。よく思よせたり。右。なら法師は。得業になるゆへにや。されど。たゞこうにこそ侍れ。とくは今より所なきにや。以左爲勝。

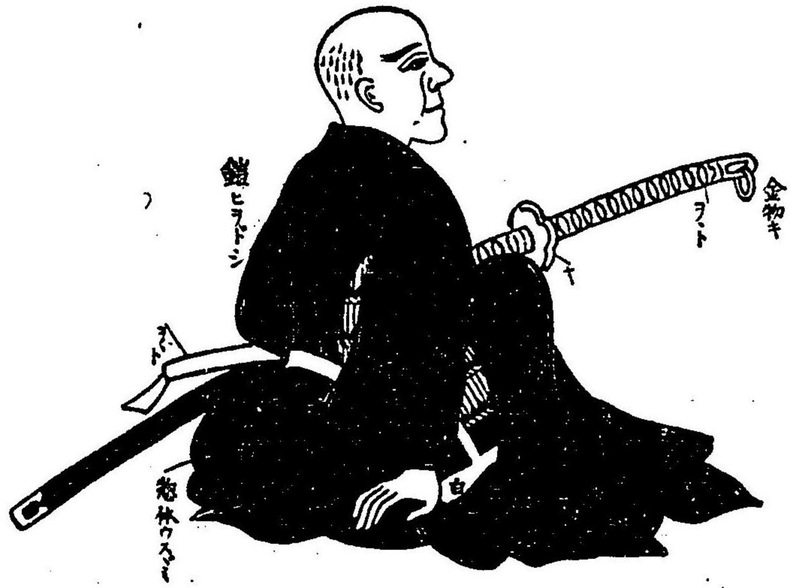
山法師

わがたつ
そまの
月にをよぶ
べき
所こそおぼえね。

七十一番歌合

もろこしの月
よりも見所あれ
ばこそ。春日なる
みかさの山とは
よみつらめ。

なら法師



六十九番

我法のむしろいかにと人とはゞ。清瀧川にすめる月かげ。
われにとへ。易く答ん。月まはし。北をめぐるか土を巡るか。
左右ともに。深き心をつたへ。されば。まさりをとり申がたし。左は。定て其心深かるべき歟。清瀧の流はかりかたし。右は。倶舎論にもかたはしあらはし侍るにや。それ猶定がたきにや。なずらへて負持。

思ふ人あはれ茶すきに成たらば。掬さらすべき時もあらまし。
待人のくるや〳〵とおもふまに。北斗の星をまはりあかしつ。
左歌。慈に茶のよせを求侍ると。才學少し。右。人を待とて。心ならず北斗を守る。さも有ぬべし。仍右負勝。

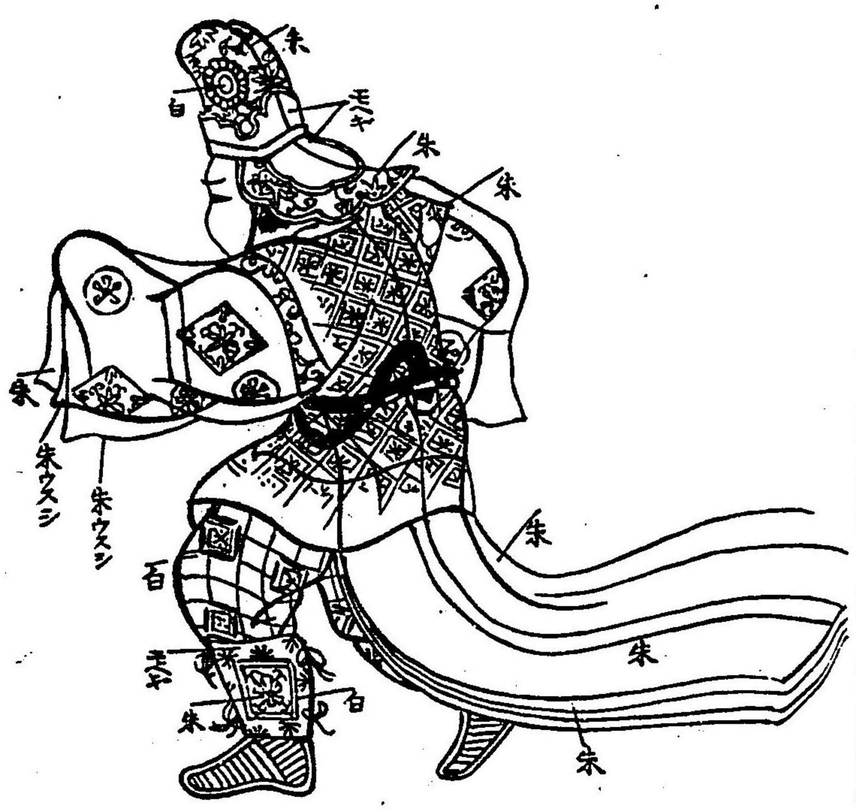
華嚴宗

御もいくの御
茶のゝこり
にて候。

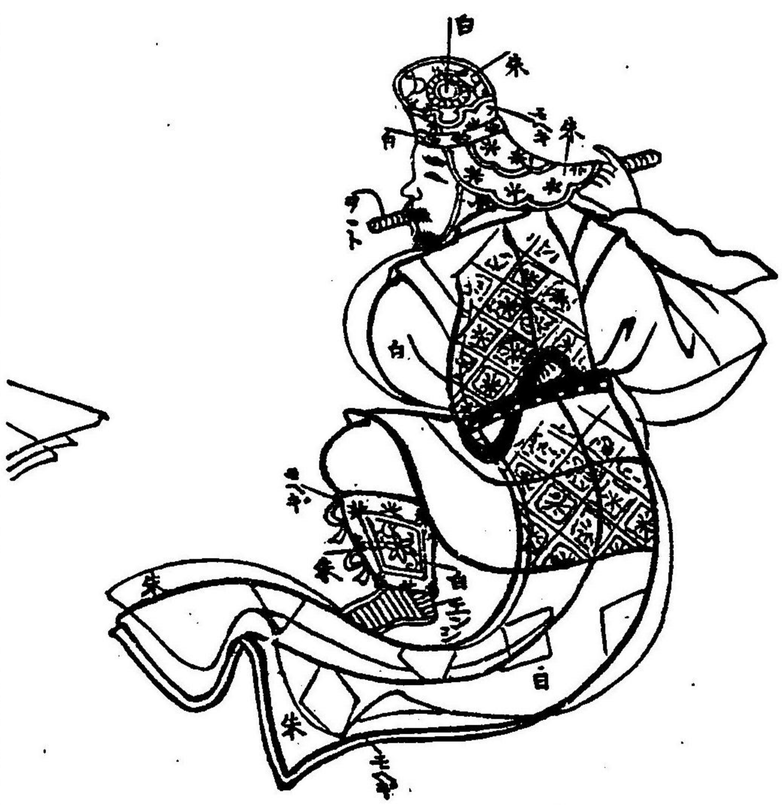
北斗の御所
はじめ候間。
ひまなく候て。

俱舎ゑう

舞人



樂人



七十番

面白や竹のあらべにえたがひて。夜ごとの月も心すむかな。
入かたの月にまはゝや。殷王の。日影をかへすはちの手づかひ。
左。大かた皆の聖。よにえたがふべき道理は聞えたれども。右。入日に月を滝らへ。ばち
にて招くと。かの宇治の宮のと思よせたるにや。ゆへ有にゝたり。以右爲勝。
明たてし河よりをちの笛の音の。ゆかしとせめて聞人もかな。
袖ふらば涙やみえん。から人の立まふとゝもいかゝとそ思ふ。
左右ともに。かのにはふ宮の宇治を思よせ。光君のそで打振し事になずらへて。おもひ
の色をいへり。ともにやさしく聞ゆ。よき持と申し侍べし。

七十一番

さもこそは名におふ秋の夜半ならめ。あまり澄たる月の影哉。
うらぼんのなかばの秋のよもすがら。月にすまずや我心てい。
左。あまりといひて。すとは聞えたるを。かさねて。すとよめるやいかゝ。右は。うらぼん
のよもすがら。心ぶと賞るとしかり。心ていきく心地す。右可勝。
いつまでか待宵ごとの口つけに。あすや〳〵といふをたのまむ。
我ながらをよばぬ懸とおもりながら。思よりける心ぶとさよ。
左歌は。詐つくる人は。あすや〳〵といひて。既とにするといへるを詠るにや。艶にきこ
ゆ。右は下句よろし。とり合て持にて侍べし。

酢造

わすし
きかき哉。

心太うり

心ぶとめせ。
ちうさやくも。
入て候。

右職人盡歌合繪。土佐刑部大輔光信朝臣書。東坊城權大納言和長卿詞也。事本在二住吉內記家一。秘而不レ出二圖外一。故使二門人畫師一寫之。其歌與詞以二新井筑後守君美朝臣所レ傳之本一寫レ之。淨書者。屋代弘賢也。

七十一番歌合畢

明治二十七年八月廿三日印刷
明治二十七年八月廿七日發行

定價金貳拾五錢

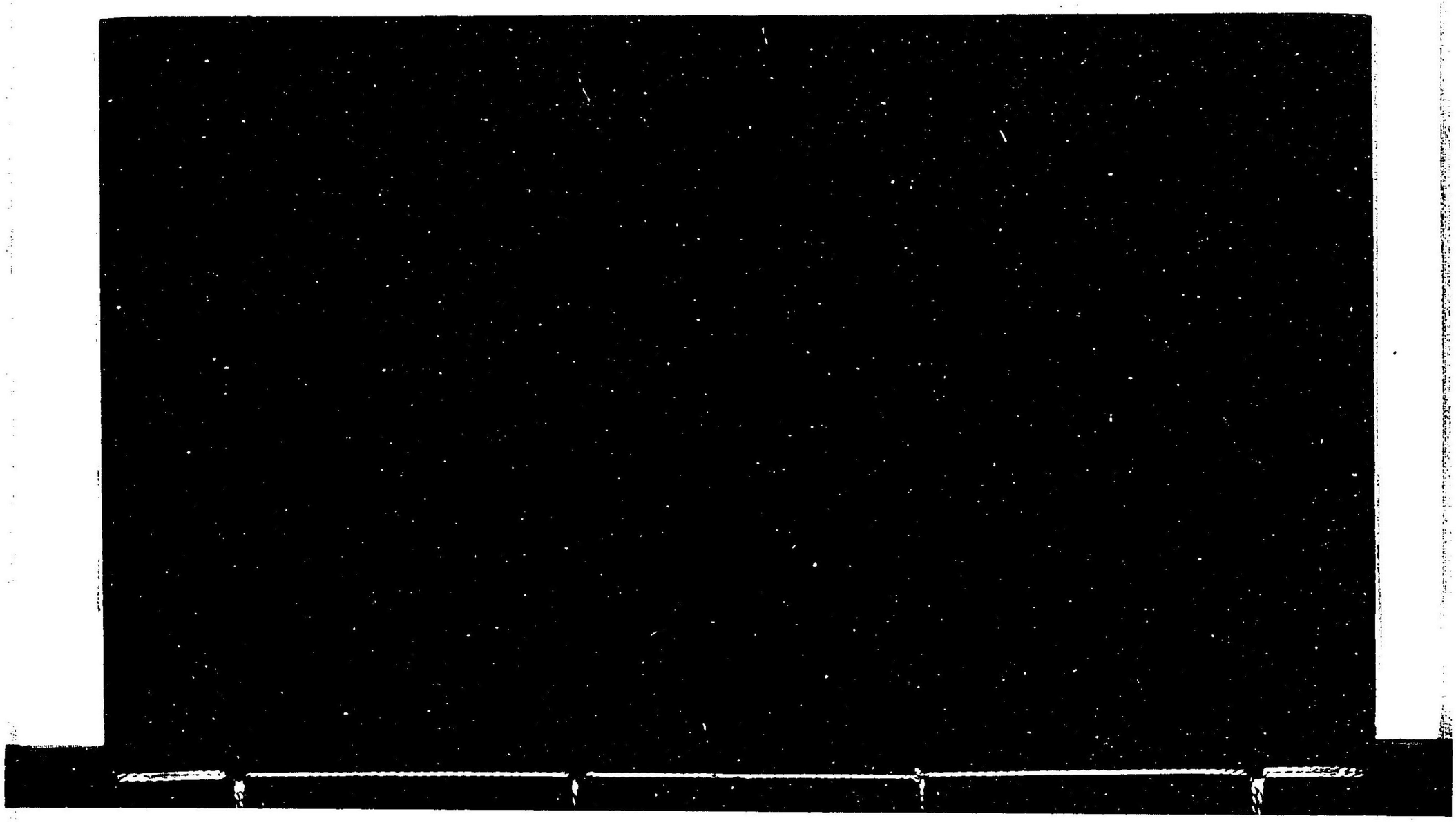
發行者　東京市京橋區彌左衛門町七番地　合名會社經濟雜誌社

右代表者社員　東京市麻布區麻布我善坊町十九番地　望月二郎

印刷者　東京市京橋區四紺屋町廿六七番地　秀英舍々員　山本鉄次郎

印刷所　東京市京橋區四紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區彌左衛門町七番地　合名會社經濟雜誌社

賣捌書肆

東京市日本橋區通一丁目	大倉書店	大阪南久寶寺町四丁目	前川善兵衛
同　通二丁目	小林新兵衛	同　北久寶寺町四丁目	丸善書店
同　通三丁目	丸善書店	同　同	三木佐助
同　下槇町	群書城	同　心齋橋筋一丁目	松村九兵衛
同　神田區表神保町	東京堂	同　安堂寺橋通南入	嵩山堂
同　同	中西屋	横濱弁天通四丁目	丸善書店
同　同　裏神保町	敬業社	神戸元町五丁目	吉岡平助
同　京橋區彌左衛門町	巖々堂	名古屋本町	川瀨代助
同　本郷區伊豆倉横町	冨々堂	同　玉屋町	片野東四郎
京都佛光寺通東洞院四入	東枝吉兵衛	仙臺國分町四丁目	伊勢安書店
同河原町二條下ル二丁目	大黑屋	越後長岡町	目黑十郎
大阪備後町四丁目	吉岡平助	同　水原町	西村六平
同　同	梅原龜七	松山湊町三丁目	向井藏次郎
同　本町四丁目	岡島眞七	熊本新町二丁目	長崎次郎